

丘の上の向日葵

ひまわり

山田太一



丘の上の向日葵

ひまわり

山田太一

丘の上の向日葵

定価 一〇三〇円

一九八九年二月二五日 第一刷

一九八九年四月三〇日 第四刷

著者 山田 太一

発行者 八尋 舜右

発行所 朝日新聞社

編集・図書編集室 販売・出版販売部

〒104-11 東京都中央区築地五-1-11

電話 〇三-五四五-〇一二一(代表)

振替 東京〇-一七三〇

© TAICHI YAMADA 1989

ISBN4-02-25597-4 Printed in Japan

印刷所・凸版印刷 製本所・青柳製本

丘の上の向日葵

裝幀 · 山城隆

第一章 よろめく女

この物語の発端から丁度一週間前、柚原孝平は勤め帰りの南武線府中本町のホームで、同じ研究所の高山里美とたまたま一緒になり、こんな話を聞いた。

第二次大戦中のドイツ軍捕虜収容所でのことである。フランス人の捕虜たちの間に、こんなことがあったという。

（この話は、ロマン・ギャリの本からコリン・ウィルソンが要約したものをハワード・F・ドッサーが引用した文章の中にあり、その翻訳を里美が読んだのであったが、孝平はそんな経緯は知らない。ただ、おおまかにいって二つの感想を持った。それは、あとで述べる）

収容所の中で、フランス人たちは士気沮喪していた。

するとある捕虜がゲームをやろう、といい出したのである。

ゲームは、収容所の自分たちの棟に女の子がひとりいると想像しよう、というものであった。それが、心を集中し能力をふりしぼって自分にとってもっとも魅力のある女の子を想像する。そして、その子が小屋の隅のベッドにいると思いい込むのである。

服を脱ぐ時には、毛布をつい立て代わりにして女の子に見られないようにする。汚い言葉を使った時には、その子の方を向いてあやまらなければならない。

どうせ時間はいくらでもあった。みんなその気になり、目を閉じて、とびきりの女の子を思い浮かべようとした。まずはピンクの肌を。次は輝くばかりの美しい髪を――。

女の子は息づきはじめた。いまにも見えて来そうに、娘はその棟で暮らしはじめた。その棟の男たちは元気が出て来た。

ドイツ軍は、その棟だけの活気に疑問と不安を抱いた。そして、たちまちゲームのことをつきとめ、司令官は悩み、遂に部下をひき連れてその小屋へのり込み、女の子のひき渡しを命令したのである。そんな娘は、ドイツ軍相手の売春宿に、ほうり込んでやる、と。

捕虜たちは、抵抗した。

とびきりの娘をおめおめ連れ去られて、二番手の女の子と生きるのは、みじめなことだった。娘を守れなければ、男ではなかった。

捕虜たちの頑強な抵抗に、司令官は自分の敗北を知った。主謀者の捕虜を独房にたたきこみ、忘れることにした。

独房でゲームの発案者は、新しいゲームにとり組んだ。果てしない草原を思い浮かべ、象の大群と一緒に走り回り、長い監禁の間、正気を保ったのだった。

孝平は里美がそんな話をしたことに好感を抱いた。同じ洗剤メーカーの研究所だが研究室のちがう。四十五歳の孝平と二人になり、二十五、六の里美はたぶん話題に困ったのである。

しかし、普通の娘はそんな話はないだろう。

電車の中で孝平は、話を続ける里美の横顔をさり気なく何度も見た。こんな綺麗な子だったか、と思った。少なくとも入社して二年はたっている。これまで何度か口をきいているし、商品テスト室へ行く度に、見かけていたはずである。どうして今まで魅力に気がつかなかったのだろうか。不思議なような気がした。ひそかに嬉しくもあった。このところ研究所には、人の目を楽しませるような女性はいない、と思っていたのである。

里美の捕虜収容所の話が終わると、

「面白い」

と孝平はさっぱりとした笑顔をつくった。実のところ、やや複雑な感慨があつたのだが、若い女にはかげりは見せない方がいい、単純に面白がる方が好かれる、という気が働いた。

「よかった」と里美は膝に置いたやや大きめのハンドバッグを両手で軽く叩いた。「私だけ面白がつてるのかなって、少し不安だったけど」

「そんなことはない」

「昨日読んで、誰かに話したかったんです。すいません」

「いい話だった。多くの研究室では、そんな話題は出ようもない」

「じゃあ」

急に里美が立ち上がった。

電車が矢野口のホームにすべり込むところだった。寸前まで立ち上がる気配がなかったので、不意につきはなされたような気持ちになった。

「ここなの？」

「いえ。今日はちょっと人に逢うんです」

さよなら、と明るく一礼してたちまち里美はホームにおりて行く。

「さよなら」

孝平は学生のような声を出した。ドアが閉まる。電車が動き出す。ホームを歩く里美に軽く手をあげた。里美も手を振る。

はしゃぐような気持ちがあり、それをあさましいとも思った。またはじまるか、と自嘲する気持ちもあった。

フランス人の捕虜たちではないが、いつの頃からか、孝平には空想にふけるところがあった。研究所に、若い娘が入って来る。気に入ってしまう。すると、帰りの電車で、その娘との関係を、半ば意識的に空想するのである。

以前、新聞記者の本で、こんな体験を読んだことがある。取材で砂漠を走っているうちに車が故障してしまった。カメラマンと二人である。見渡すかぎり砂ばかりだ。とにかく、いつか通るであろう他の車を待つしかない。陽は次第に傾いて行く。風が冷たくなって来る。心細い。その時、あることないこと性的な話ばかりをし続けたというのである。性的な話が、いちばん現実を忘れさせたという。孝平の空想には、ちょっとそういうところがあった。

だから里美が捕虜たちの空想ゲームの話をはじめた時、孝平は内心小さく狼狽した。彼の空想癖を知っていて、あてこすりをいわれたような気がしたのである。しかし、誰も知るわけがなかった。

空想癖がついたのは、三十代の半ばあたりからである。仕事を頭から追い払いたい時、意図的に誰

かとの情事を空想した。小一時間かかる夜の電車で、仕事の圧迫感から逃れたくて、相当本気になって、すぎるように、その時魅かれていた娘との情事を思い描いたこともあった。別の時には、緊張もなく癖のように、疲れた頭で、女のワンピースの背中のファスナーをゆっくりおろしてみることがあった。

しかし、それが現実になったことは一度もない。空想はいつまでも空想のまま、大抵は対象にしている娘の結婚や退職で終わりをつけた。孝平は行為では一度も妻を裏切ったことはない。

里美と別れてからの電車で、孝平は目を閉じて彼女との進展を夢想した。ひどい人生だという気持ちもないではない。夢想するだけではなく、現実に進展させなくてどうする？ という人並みの考えも横切らないではなかったが、ほぼ二十歳はなれている里美と先へ進んで、妻にかくし人目を避け、若い女の熱気をもて余したりするのは、ごめんだとも思った。

しかし、翌日の午後になって孝平は口実をつくって、里美のいる商品テスト室へおりて行った。

孝平は主任研究員である。課長待遇で三階の研究室に六人の部下がいた。

他に四つの研究室があり五つの部門で開発を競い合う仕組みになっている。第二洗濯洗剤が孝平の担当である。

「水量あれが限度だって？」

廊下から主任の松川良子が見えたので、声をかけながらテスト室へ入った。

「ええ」

何列にも並んでいるテスト用の洗濯機の一台中からシーツのようなものをひき上げながら肥満体の松川は不満そうな声を出した。「どうしてもあれ以上のデータは出なくて」

「やっぱりフロックか」

いかに少ない水で洗濯を可能にするか、というのが開発計画の一つの柱であった。

何気なく部屋を見渡すと、三人ほどの男女がいて、それから窓際の流しの前の里美を見つけた。するとまるで視線に合わせたように、後ろ姿の里美が振りかえった。

「こんにちは」

明るい微笑だった。髪が濡れていた。

「テスト？」

分かったことを聞いていた。勤務中に私用で髪を洗うわけがない。

「はい」

大きな白い襟のような丸い防水布をつけて、里美はさっぱりしたお辞儀をすると、また後ろ姿になった。動くたびに水滴が光った。

すぐ目をそらしたが、孝平は感嘆していた。美しかった。

研究室の年間計画は過密である。孝平のところだけでも一年に三十件から四十件の特許を出願できる開発が要求されていた。研究所全体の目標は年間ほぼ三百件である。どの研究室が特許成立のさいに会社から出る登録褒賞金を一番多く手にするかは、孝平の活力を大半使い果たすレースだった。

その上なが出来るのか？ 家庭の平穏を維持し、病氣にならないように気をつける。それだけで精一杯だった。誰がなにをするなどといったわけではないが、事実上はほとんど行動を封じられていた。

となれば、多少の夢想は仕方がない。一体誰がなんの夢想もせずに現実だけで生きているというの

だろう？

数日、時折孝平は里美との関係を夢想して甘い気分になった。しかし、その夢想は簡単にこわれてしまう。その夜がこの物語の発端となった。

その夜、副主任の小野寺と十時すぎまで孝平は残業をした。

灯りを消す前に、進行中の実験の確認をしていると、小野寺が「高山君に気がついてますか？」というのである。

急に里美の名前が出たので、「高山君——？」とすぐには顔が浮かばないという口調になった。

「商品テスト室の高山里美です」

「どうかしたの？」

「気がつきませんか？」

「なにを？」

「急に綺麗になったんです。明日、気をつけて見て下さい。これが高山君かって思いますよ」

「整形でもしたの？」

「結婚だそうです。去年の秋、バリ島へ行って、帰りの飛行機で相手の男と隣り合わせたっていうんです。大きなスポーツ用具店の次男坊で、五月に退職して式だそうです。女はやっぱすごいねえ、恋愛するとあんなに変わるんですねって、柴田や蓮谷なんか溜め息をついてます」

「そう」

「そうなのか。里美の輝きは、そういうことなのか。」

小野寺はドアをあけ、廊下に出て待っていた。

「目立たない子だったけど、そんなに綺麗になったの？」

「気がつかないの、いけないんじゃないかなあ」

「もっと年増に目が行くんだ」

「誰ですか？」

「研究所にいろわけないだろ」

「そこなんですよねえ。やっと綺麗になった高山君が嫁に行っちゃうんじゃ、働く喜びなんかないじゃないですか」

小野寺は、門の脇の守衛室に鍵を置きに走った。小野寺も堅い男だった。研究所の男たちは大抵色事には不器用で「愛妻家」が多い。仮に里美が結婚しなくなつて、妻帯者の誰かが彼女と出来てしまふなどということは、あまりありそうもなかった。それでも里美が「嫁に行っちゃう」と「働く喜び」がなくなるなどといっている。小野寺も里美との架空の情事を夢想していたわけだ。「俺が特別変わっているわけではない」

小野寺は京王線なので、五分ほど歩いたところで別れることになる。

十時半近い南武線はすいていた。

ひとりになると、次第に失望が身体中に行きわたり、力がぬけて行くような感じがあった。

「そうですか」とだるいような頭でくりかえした。「結婚をしまうのですか」

南武線を溝の口で降り、私鉄の田園都市線に乗り替えるには、一度町へ出なければならぬ。百メートルほどだが、アーケードの商店街を歩くのである。

それから田園都市線の下りホームに上る。待つ人はまばらだった。

電車が来るまで七分ほどあった。少し寒い。

気がついて、ホームを前方に歩いた。降りる駅の階段の位置に合わせて線路に向かって立つ。こういうのが現実的というのだろうな、などと思った。

それから急に背後に人が近づく気配がした。

「すみません」

振りかえろうとすると、いきなり右肩を掴まれた。

「ごめんなさい」

女のさしせまったような声だった。香水が匂った。

「気分が悪いんです」

背中に女の頭が押しつけられた。吐かれては困るという気持ち肩に出たかもしれない。「吐いたりはしません」とすぐ女はいった。しっかりとしようとしている声だった。「めまいなんです」

「駅にいいましようか？」

「いいえ。このまま——」

女の声は少し震えた。

線路をへだてた反対側のホームで、若いセーターの男が孝平を見ていた。なにが起きたのか、という顔だった。背後に人がいて前を向いて話している。動かすにはいられなくて、

「無理をしない方が」とまた振りかえろうとすると、右肩を掴んだ手に力が入った。

「いいんです」

振りかえられまいとするようにも感じた。女の息づかいが大きくなった。

スピーカーが「間もなく」といった。「中央林間行きの普通電車がまいります」

「乗るんですね？」

孝平は真後ろの女にきいた。

「ええ」

めまいだといったが、それだけではないような気がした。込んでいるならともかく、人のまばらなホームでふらついて、知らない男の肩に掴まるだろうか？ 掴まる余裕があれば、うずくまるのではないか？

電車のライトが見えて来た。

すると不意に女が離れた。「ごめんなさい」小さく押し出すような声がした。

「いえ」

露骨に振り向くのもためらわれて、横顔を向けた。それでは真後ろにいる女は見えない。紺のコートが目の端に入った。

すべり込んで来た電車は意外に込んでいる。

ドアがあくと降りる人も多く、脇へ寄ると女も動いた。

「座れそうもないけど」

また横顔を向けて、見えない女にいうと、

「大丈夫です」

無理に笑顔をつくったような声が、背後からかえって来た。乗り込む時、また女の手が軽く孝平の

背中に触れた。導くようにやや通路に入り、吊り革に掴まる人々の背と背にはさまれた空間で「もし」といいながら孝平は振り向いた。

「え？」

一瞬いおうとしたことを忘れた。女の目が間近すぎて「ああ」と孝平は思わず上体をそらせた。

女は目を伏せた。

「もし」孝平は一歩さがり、今度はちょっと上体を前に出し「ふらつくようなら、掴まって下さい」となるべく周囲に聞こえないようにいった。

「ええ。でも、大丈夫」

女も小声で、さりとって微笑した。

それだけで、狭い空間に二人だけでもぐりこんでいるような親密な気分が横切った。

目のいい人だと思った。

目尻に皺もはつきりと刻まれて、おそらくもう三十代の後半だろう。しかし、率直で敏感そうな優しい目をしていた。口は少し大きい、それにあたたかい印象があり、嫌味のない顔だった。

妙な気がした。いまのいままで、ただのめまいではないような、不審なものを感じていたのに、それが嘘のように消えていた。

「すみません、失礼なことを」と女がいった。

「いいえ」

「いつもあの位置で乗るもので。降りる時、階段がすぐで」

「私もそうです」

「どちら？」

降りる駅をいうと「同じ」と可^{おか}笑しそうに笑った。まばらなホームで、自分の背後に立ったわけが分かった。その時は、そう思った。

「しかし、よかった」と孝平は微笑した。

「え？」

「なんでもなくて、よかった」

「おかげさまで」

何気ない会話だったが、後ろめたさのようなものが残った。家に近い電車である。誰が聞いているか分からない。いまの穏やかで知的な中年男という口調は、いつもの孝平とはややちがっている。いつもだって穏和で知的ともいえるのだが、「しかし、よかった」などという口はきかない。「でも、よかったじゃないですか」というようなところが自然である。気取りがあった。女として上気していた。向き合ってみると自分の周囲にはあまりいない女であった。目の端で見た時は暗い感じがした紺のコートだったが、改めて見ると薄手で肩パットの入ったふくらみのある洒落たデザインだった。襟と前合わせに白い生地が大胆に使われている。誰でも似合うというものではなかった。

大ざっぱに女性を二つに分けて、自分が日常に出会う女性とモデルとか俳優とか絵に描いたようなキャリア・ウーマンとか、自分とは無縁な女性というような分類をすると、目の前の女は縁のない方に属するようなところがあった。プロポーションも髪や服装の感覚もあまり見かけないものを感じた。年をとっている分、気が楽だが、若かったら近づきにくいだろう。自分などを相手にする女ではないと、はじめから近づかなかったかもしれない。田園都市線は沿線に小綺麗な新興住宅地が多い。孝平